仏教語彙受容史研究序説*

角　岡　賢　一

▶キーワード
仏教語彙
仏教受容史
日本仏教史
専門用語と一般用語
語彙史

▼要　旨
この小論では、仏教語彙受容の変遷を日本語語彙範疇において通時的に位置付けてみる。インドに源流を持つ仏教は中国経由で日本に招来されたために、日本語における仏教語彙は大部分が漢語として受容されている。漢語においては、原語から意訳せずに音写した語彙と意訳を施した語彙に大別することができる。千五百年以上に及ぶ日本の仏教語彙受容史においては、特定の時代にある宗派に関連する語彙が借入されたり造語されたという特徴が備わっていることを示していく。例えば仏教伝来当初は、神道固有の「国神（くにつかみ）」に対して仏を「蕃神（となりのくにのかみ）」と称していたが、「蕃神」という表現は現代においてはもはや通用していないと言える。この小論で提唱する研究方法によって、時代に固有の語彙と時代を超越してきた語彙の差が明らかとなってくる。

＊　本研究は、2005年度本願寺財団研究助成を受けています。（研究課題「一般社会に流通する仏教語彙の意味変遷について」）

1．はじめに

この小論では言語学的な視点から、日本語の語彙において仏教用語をどの時点で、どのように受容してきたかを検証するための枠組みを提示する。また現代日本語において仏教語彙という範疇が全体に占める比率という観点から数量的把握に留意し、日本語語彙論研究に新しい枠組みを提示する試みとしたい。

今後の構想として、仏教語彙受容史を視野に納めた数千語規模以上の仏教語彙データベースを構築する予定である。この小論はそのデータベースの枠組みを提示するものとしたい。データベースには、教義を端的に示す仏教語彙を中心に採録する。教義は、「不立文字」「只管打坐」のように四字熟語として形成された部類が代表的である。これらのうち、現代にまで伝えられている語彙も多い。経典名、如来・観音などの名称も採録の対象とする。各採録項目には、可能な限り日本における受容期を特定し、日本仏教史における歴史的変遷を辿れるように試みる。

先行研究としては、角岡（2003, 2004）で仏教語彙の小規模データベースを試行的に構築している。しかしながらこれらは、規模が数百語程度であること、あるいは新聞記事に出現した語彙の度数を検証したものであり、今後の構想としているものとは差がある。

この小論では、教義などの重要な語彙については原義、すなわち語本来の意味で採録されている場合が多い。例えば法華経を讃える「南無妙法蓮華経」という「題目」である。この句は、法華経を根本聖典とする天台宗や日蓮宗で唱題される。しかし時代が下り、「お題目」という表現で一般語彙化すると「口にするだけで、実質の伴わない主張」（『大辞泉』）というように意味変化が生じる。この小論での手法を敷衍し、通時的に語彙の用法を収集すればそのような意味変化の跡付けも可能となるであろう。

以下の考察における仮説として、「各宗派が根本聖典としている教典の招来時期と、その宗派の立宗時期は必ずしも一致しない」と考える。一例は「無量寿経」である。この教典は、鎌倉新仏教として成立を見た浄土系宗派が重視する浄土三部経の一であるが、日本には奈良時代に招来されている。

以下、データベースに採録している語彙には下線を施して仏教用語としての区別を明らかにする。巻末にデータベースを付す。

2．伝来期から奈良時代まで[*1]

日本への仏教公伝年代については、二説が有力である（奈良（編著）2005：29）。『上宮聖徳法王帝説』あるいは『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』によると、宣化三年（538）を伝来とする。もう一説は『日本書紀』で、第一説より14年遅い欽明13年（552）、百済の聖明王が伝えたと記している。これら二説より更に早い年代を伝えているのが『扶桑略記』[*2]で、継体16年（522）唐の鞍作村主司馬達等（くらつくりのすぐりしばたっと）が来朝し、大和の国高市郡坂田原に草堂を結んで仏像を安置した、と示している（同書、28ページ）。公伝直後の仏教がどの宗派で、どのような教義に基づいていたかは詳かでないという。この時期、渡来仏教について伝えられている文献が少ないために、具体的な姿は不明の点が多い。

仏教伝来直後、守旧派で神道の神祇崇拝を主張する一派と、渡来の仏教に切り替える革新派

間に抗争が持ち上がった。守旧派には物部尾輿（おこし）と中臣鎌子（かまこ）、仏教受容派には蘇我稲目が挙げられている（同書、30ページ）。日本古来の神祇を「国神（くにつかみ）」、仏を「蕃神（となりのくにのかみ）」と呼んだという。この命名法は、「ほとけ[*3]」という語が形成される以前の認識を示しているものとして興味深い。

仏教公伝年代は上述のように諸説あるが、いずれにしても紀元6世紀の前半から半ばにかけてと考えられる。神道の主宰者たる天皇は、物部氏と蘇我氏の対立に距離を置く対応をしていたが、用明帝が即位した585年に仏教信仰の表明へと踏み込んでいく。推古朝（593～629）に入って、摂政の聖徳太子が積極的に仏教興隆の方針を推進するようになった。

聖徳太子制定の十七条憲法の第二条に「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり」と述べられている。推古二年（594）には「三宝興隆の詔」が発せられている。また太子自身が経典の註釈を行ったことについて異論はあるとしても、『三経義疏』がその著作として伝わる。「三経」とは勝鬘経、維摩経、法華経である。飛鳥時代の宗派・教義を代表するものとして、この三経が重要視されていた証左であろう。

太子逝去の後、法隆寺金堂の本尊・釈迦三尊像と共に「天寿国繍帳」が追贈された。「天寿国繍帳」の銘には、太子の遺訓として「世間虚仮、唯物是真」が見られる。同様に太子の遺訓として「諸悪莫作、衆善奉行」も伝えられている。後者の二句に「自浄其意、是諸仏教」を加えて四句で七仏通戒偈としている。

推古帝を継いだ舒明帝（629～642）により、初の勅立寺院たる百済寺が建立された。舒明期に宮廷において「無量寿経」講経と斎会（さいえ）（僧を集めて斎食を施す法会）が行われた。「無量寿経」は、鎌倉仏教期の浄土宗・浄土真宗で重んじられた浄土三部経中の「大経」と通称される大部の経であるが、このように飛鳥時代においても浄土信仰に先だって重視されていた歴史が見られる。

舒明帝から30年を経た672年践祚の天武帝期には、一切経（大蔵経）の書写、放生会、設斎が行われた。この時期、諸国に使者を派遣して講ぜられたのは「金光明経」「仁王般若経」であった。

奈良時代に入り、鎮護国家という思想を盛り込んだ官寺仏教が興隆した。その画期は金光明四天王護国之寺（東大寺）を建立した聖武朝（724～749）であろう。平安遷都後、平城京を「南都」と位置付けた事実に関連して、奈良の都で展開された諸宗を「南都六宗」と括っている。三論、法相、華厳、律、倶舎、成実の六宗である。この六宗は、鎌倉以後の「宗派」ではなく、「学派」と解すべき存在であった。この時代、各寺院でこれら六宗が兼修されていた点にその一端が見られる。

三論宗の根本教理は「破邪顕正、真俗二諦、八不中道」という語に集約される。法相宗は、インド仏教瑜伽行唯識派の流れを汲み、根本教義は「阿頼耶識」に象徴される。「阿頼耶識」とは、「宇宙万有の展開の根源とされる心の主体」（『大辞泉』）。倶舎宗は独立した宗派を形成することなく、法相宗に付随して学ばれた。成実宗も同様に三論宗に付随した。律宗は、三蔵[*4]――経・律・論のうち律に立脚するという点で特異である。他の宗派は、上述したように主として経論を中心として教義を展開している。華厳宗は、現在その総本山が総国分寺たる東大寺であることに象徴されるように、鎮護国家思想の中心的存在であった。東大寺大仏殿に安置されている毘盧舎那仏（大仏）は華厳経の説く世界の具象化であった。

仏教公伝から平安遷都（794）までの200年余りは、仏教が日本に定着し、国家権力による護

持が篤かった時期であった。しかし、仏教があまりにも政治と不可分の立場にあったことが平安遷都の直接動機であったというのは、宗教と政治の力関係という観点から見逃せない。

3．平安期――密教の招来[*5]

奈良時代の84年間、朝廷すなわち国家権力と仏教勢力が不可分の関係となり、運命共同体として相互作用していたものと考えられる。平安遷都とほぼ時を同じくして、南都仏教に別れを告げる平安仏教が興されたのは象徴的と言える。

南都六宗が小乗仏教による受戒を行ってきたのに対して、伝教大師最澄（767～822）は比叡山延暦寺を開き、大乗戒壇を設けることに尽力した。天台宗の根本聖典は「法華経」であり、五時八教の教相判釈（教判：各経典の教理を比較し、相対化して位置付けること）と一念三千の観法（絶えず変化する心：一念と、天地宇宙の一切：三千が一体であることを観察する）を重視する。宗祖・伝教大師が入唐して学んだ中国天台宗には元来、密教の要素はなかった。しかし相伝された内容は「四宗合一」であり、円、禅、戒、密の四宗が混交している。顕教の修法としては「朝題目に夕念仏」と言われる法華経と阿弥陀経の兼修が特徴的である。朝題目は中国天台宗の天台大師が著した「法華三昧懺儀」に基づく法華懺法、夕念仏は例時作法に該当する。宗祖・伝教大師当時の密教的要素は、印を結び真言を念誦する「光明供」という修法ぐらいであったが、慈覚大師円仁（794～864）、智証大師円珍（814～891）の下で著しく密教化した（天台密教：台密）。円仁は教理では法華も真言も同等、修法では真言が優るという教相判釈を下した。教理を「理」、修法を「事」という。円珍に至っては、理・事ともに真言が優るという判定となった。このような密教化に伴って藤原氏との結びつきが強くなり、多くの所領寄進を受けた。

日本への伝来当初より密教としての性格を有していたのが真言宗である。弘法大師空海（773～835）が入唐し、恵果より伝法灌頂を受けた。中国に密教が伝えられたのは紀元八世紀、善無畏、金剛智、不空などインド僧らによってであった。日本における密教と顕教の区別では、一般に密教は天台宗と真言宗、それ以外を顕教とすることが定着していると言える。上述したように、天台宗は時代と共に密教的要素を濃くしていった。宗名の「真言」とは、真言陀羅尼（如来を象徴する神聖な呪句）から採っている。根本聖典は「大日経」と「金剛頂経」の両部大経であり、教理の骨格は六大・四曼・三密である。六大とは地、水、火、風、空、識であり、宇宙の全存在は六大が融合一体となって現れると説く。三密とは身・口・意を意味し、手に印を結び、口に真言を唱え、心に三昧を修することによって即身成仏を説く。四曼とは曼荼羅であり、大・三昧耶（さんまや）・法・羯磨（かつま）の四種である（『広辞苑』）。実践論としては他に、阿字観（全宇宙の象徴である「阿」一字を観ずること[*6]）や諸尊の加護を求める加持祈祷があり、密教の特徴を表している。真言密教は「東密」と称せられる。

弘法大師は唐から帰朝後、嵯峨天皇より入定処として高野山を賜り、金剛峰寺を建立した。また京都の東寺も賜り、これを教王護国寺と改めた。皇室と縁が深かったことは、空海から灌頂を受けた歴代天皇が平城・嵯峨[*7]・淳和の三代にもなること、大覚寺や仁和寺など門跡寺院が真言宗内宗派をなしていることに現れている。

平安遷都の発端は、南都奈良に政治と仏教の中枢が集中していたことに起因していたのであ

るが、遷都後は南都宗派も勢力維持を図っていた実態が窺える。天台宗と法相宗の間で交わされた「三一権実論争」がその一例である。内容は、成仏を巡っての人間観に関するものであった。また南都戒壇は小乗のみであったのに対して、伝教大師が大乗戒壇を設立することに邁進したが、勅許が下ったのは大師没後七日目のことであった。

政治上は摂政や関白が実権を握るようになるのに伴って、平安中期から末期にかけて浄土信仰が盛んになった。既に初期において比叡山で、円仁が常行三昧堂を建立し、天台浄土教が興った。摂関政治期では、藤原道長が法成寺に籠り、道長の子・頼通は宇治に平等院を建立した。恵心僧都源信（942～1017）も叡山浄土教の流れを汲み、『往生要集』を著した。平安期の浄土信仰を特徴づけるのは、これは貴族階級の占有であって、鎌倉新仏教のような大衆信仰に至っていないという点であろう。私見では、地理的な要因と社会的な要因からこのような限定性が生じていたと考える。地理的な面では、平安遷都によって南都と北都という二極が生じたものの、いずれにしても地理的広がりは「畿内」という範疇に納まっている。このような地域限定性は平安期の政治と同一側面で捉えられるべきであろう。社会的な局面では、庶民階級に仏教信仰・浄土信仰を促すような要因が見られなかったという結果論的な推断成立がされうる。社会面では、生活面での余裕という基準からも立論が可能であろう。すなわち当時の農業生産水準では、信仰に振り向ける余力は乏しかったと考えられる。

4．鎌倉仏教[*8]

平安末期は、末法思想の流行に重なり、天変地異が相次いだこともあって庶民の不安心理は極大に達していたと考えられる。しかし南都六宗と平安仏教の密教思想は、「諸行往生」であって、種々の功徳を積まねば浄土に往生できないと説いていた。従って、財力のある貴族らは競って阿弥陀堂を建立するなどして実践に努めたが、救われないのは日々の生活にも事欠く一般民衆であった。これら衆生を救おうという発想に立ったのが一連の鎌倉新仏教であった。鎌倉新仏教は、浄土系・禅宗・日蓮系に三区分するのが妥当であろう。この三系統に帰依した新・仏教徒の末裔は、今世紀の日本における人口の過半を占めるほどの勢力をなしている。

国際関係面では、鎌倉新仏教立宗当初は中国に宋朝（南宋）が健在であった（南宋は790～1279）。南宋へは臨済宗や曹洞宗を招来する僧が渡来して仏法を修めるなど、日本と良好な関係を結んでいた。ところが元は南宋を滅ぼした後、文永の役（1274）と弘安の役（1281）の二度に渡って日本に矛先を向けた。以後、1368年に明の太祖によって元が滅亡するまで、日本と中国との交流は途絶えた。

4．1　浄土系

浄土宗の開祖、円光大師法然上人の生まれは平安末期である（1133年生、1212年没）。幼少の頃に比叡山に入山したが、学僧の道を断念した。理由は、同僚の学僧が名誉欲に駆られて修行するのみで、衆生を救おうとしない姿勢に失望したからであった。恵心僧都源信の『往生要集』を何度も読み返し、そこに引用されていた中国の浄土思想、善導の言に救いを見いだした。それは「念仏こそが正定の業である」という教えであった。1175年が立宗とされる。法然上

人は仏道を聖道門と浄土門に二分した。聖道門とは鎌倉仏教以前の教えで、自力に依らなければ救済されないという考えである。平安貴族のように、財力があれば堂塔の建立によって功徳を積むという道があるとしても、財力がなければ仏門に入って自ら厳しい修行を積むという選択肢しかあり得なかった。それに対して浄土門の考えでは、阿弥陀如来の力によって念仏を唱え、浄土に往生するというように易行を前面に打ち出していた。

法然上人の弟子で、上人同様に比叡山での修行から浄土門に進んだのが見真大師[*9]親鸞聖人（1173～1262）である。九歳で叡山に入り、二十年を修行に過ごすも、自力での悟りを得られなかった。叡山を降りて京都市中の六角堂に参籠中、聖徳太子の夢告に遭遇して法然上人の下を訪ねた。念仏停止の法難に連座して東国に遠流された折り、同朋同行の浄土真宗を築いた。浄土宗から独立して独自の宗派を立てたのは、「阿弥陀如来のお力によって念仏を唱え、浄土に参らせて頂く」という宗旨を一歩推し進めるという目的があったのであろう。念仏に専念し、その他の行いは雑行としてこれを修することを禁じた[*10]。また『歎異抄』で名高い「悪人正機説」は、師である法然上人が唱えた可能性も指摘されているが、いずれにしても中国の浄土思想から日本独自の道を歩み始めた教説として重要であろう。

浄土宗、浄土真宗に次ぐ浄土系の第三宗派として時宗が挙げられる。立宗は円照大師一遍上人（1239～1289）である。十歳で出家し、十三歳で浄土宗門下に入った。一時還俗したが三十三歳の折り信濃・善光寺で善導の説いた「二河白道」の比喩に感銘を受け、改めて念仏の教えを弘めることに目覚めた。二河白道の比喩は、次のように説かれている（高田（2006：18-19））。

(1) 西に向かって独り進んで行く旅人が、無人の原野で、「火の河、水の河」に出会い、進めなくなります。火の河・水の河の中間に一筋の白道があるが進めそうにありません。困っていると、後方・南北より群賊悪獣が害そうと迫ってきます。進んでも退いても、また、とどまっても死を免れないと覚悟をし、思い切って白道を進もうとしました。すると、東の岸から「進んで行きなさい、大丈夫です」と勧める声が聞こえてきました。また、西の岸より「すぐに来なさい、護ってあげます」と呼ぶ声が聞こえてきました。後方からの〈危険だから戻りなさい、私たちは何も害そうとしているのではありません〉という誘いをも振り切って、旅人は一心に疑いなく進んで、無事、西岸に達することができた、という物語です。

一遍上人は全ての人に念仏を唱えてもらうにはどのようにすればよいかと考え、融通念仏を実行した。そして、「ただ一度念仏を唱えるだけで極楽に往生できる」という教えに歓喜した人たちが踊り出し、これが踊り念仏に発展したという。

4．2　禅宗

日本での禅は、法相宗の祖・道昭が紀元七世紀に中国より伝えているが、独自に禅宗として発展したのは鎌倉新仏教である。時期的には、浄土系宗派が成った鎌倉幕府成立期より少し遅れる。

千光国師栄西（1141～1215）は、親鸞聖人より生年は早い。二度に渡って入宋しているが、二度目に臨済宗黄龍派の禅を継承し、帰朝後は日本臨済宗の祖となった。主著は『興禅護国論』『喫茶養生記』。鎌倉期に渡来した中国禅僧の禅宗興隆に残した功績は大きい。宗祖を受け継ぐ世代として蘭渓道隆（1213～1278）、無学祖元（1226～1286）が挙げられる。この二人は中国からの渡来僧である。禅の宗義を表現した四句として「不立文字、教外別伝、直指人心、見性成仏」が格好であろう。また公案を思索の対象とする禅風は「看話禅」と呼ばれる。

日本曹洞宗の開祖は承陽大師道元（1200～1253）であるが、同宗はいま一人、瑩山紹瑾を太祖としている。道元は叡山で学んだ後に建仁寺で栄西に禅の教えを受けている。入宋して曹洞宗を継承し、帰朝後三十四歳頃に立宗した。旧仏教からの圧力が強まったので都を避けて越前に永平寺を開き、主著『正法眼蔵』を執筆した。太祖・瑩山は四世であり、大本山総持寺を開いた。宗旨は、「座禅に集中する」という意の只管打坐という句に象徴される。禅風は臨済と対照的であり、公案を通じて思想を体系化することのない「黙照禅」である。

4．3　日蓮宗

立正大師日蓮聖人（1222～1282）の開いた日蓮宗は、鎌倉新仏教では最後発の部類である。日蓮聖人は天台宗の清澄寺に学び、法華経に開眼した。釈尊の教えは法華経にその神髄があり、釈尊を「久遠の本仏」と規定し、末法の世の救いは法華経の護持にあると説いた。主著は『立正安国論』であるが、この筆禍により伊豆に流罪となった。また日蓮宗の宗旨は他宗を攻撃する性格が強いと指摘される（折伏）。宗旨は、「南無妙法蓮華経」という題目を唱えることに集約される。

紀元六世紀の公伝から平安時代末年の十二世紀末に至るまで、仏教は統一国家の成立・確立と軌を一にし、庶民の側に立っていなかった。南都六宗からは、天台宗と真言宗の成立が自分たちの存立を脅かす法難と映り、鎌倉新仏教の成立期には南都・北都の旧勢力が同様に存立基盤の危機という利害で一致して新仏教を迫害したというのは、歴史の皮肉な反復であろう。しかしながら鎌倉新仏教の出現によって、仏教は僧侶と貴族、国家の独占を離れて初めて衆生救済へと歩みを進めたことになろう。

5．室町、安土桃山時代[*11]

前節で概観したように鎌倉時代は、現代に至る日本仏教の大きな潮流が形成された。それも、幕府が開かれてから50～60年間に新宗派立宗が集中した。続く室町時代は対照的に、新しい宗派が興るという動きは少なくなった。注目すべきは、鎌倉新仏教として成立した諸宗派の消長であろう。

浄土宗は、鎮西派と西山派に分かれた。浄土真宗では、八世法主蓮如上人が本願寺の勢いを盛り返した。当時、本願寺よりも隆盛を誇っていた仏光寺を配下に入れようと企て、周辺の配下五十四箇寺のうち四十八箇寺を取り込んでしまった。また蓮如上人は近江から北陸一帯にも勢力を伸張した。蓮如上人は多くの手紙によって教線を拡大したが、「信心為本、王法為先」と説いた。信心を根本としながら、現実にも対応する柔軟な姿勢の現われと解すべきあろう。

石山本願寺を建立したのも蓮如上人であった。孫の証如上人が1532年石山本願寺を本山とし、1570年以降織田信長軍と闘った。本願寺は1580年に紀州に、後に京都に移転した。また室町末期、加賀・能登・越前・三河や近畿一円で勃発した一向一揆は、一向宗（浄土真宗）勢力によるものであった。

日蓮宗は、成立直後の1290年に興門派が分かれ、近代には日蓮正宗となる。織田信長による安土宗論（1564）で敗北し、折伏的布教を禁止された。また1595年には、不受不施派と摂受派との論争が起こった。不受不施派は江戸時代を通じて弾圧され、多くの殉教者を出した。

また鎌倉新仏教ではないが、真言宗にも室町時代前後に変化があった。1140年、古義派から新義派が分かれたが、1585年に新義派が更に智山派と豊山派に分裂した。

天台宗では、元亀の法難（1571）として知られる織田信長による焼き討ちがあり、堂塔・僧侶ともに壊滅的な打撃を受けた。しかし法難から十年余りを経て根本中堂の復興が成り、徐々に元の姿を取り戻していった。

この時代は、禅宗が文化や芸能と結びつき、日本独自の風を形成していった。

室町幕府三代将軍足利義満は、宋の官寺制度を導入して「五山十刹」制を確立した。紀元十四世紀末の頃である。鎌倉と京都にそれぞれ五山と十刹が定められた。これら禅寺においては漢詩文が盛んとなり、「五山文学」と称せられた。

世阿弥（1364～1443）によって大成される以前の能楽は猿楽であった。猿楽には日本固有の神楽、田楽と外来の散楽などの要素が見られたが、能楽の曲「百万」「隅田川」「弱法師」では仏教思想の影響が色濃く見られる。

茶道では、一休禅師宗純（1394～1481）に参禅した村田珠光（1422～1502）が作法に禅の精神を採り入れた。千宗易（利休）（1522～1591）は、武野紹鷗（1504～1555）に学び、侘茶の道を完成させた。茶道と華道は関連が深い。茶の席で花を飾るために、華道が確立していった。

鎌倉新仏教が定着していったこの時期は、仏教本来の教義や風習が日本に定着する過程で変化を受けていったとも言える。端的には、葬送と先祖祭祀に関してである。原始仏教は、独自の葬送儀礼を有していなかった。近代宗教学の定義から考えると、「死」という重大な機会に際して葬送儀礼が整っていなかったという原始仏教は不可解な宗教であった。具体的には、釈尊の葬送儀礼に際して導師を務めたのがヒンドゥー教のバラモンであったという。しかし日本に伝来して千年を経たこの時期、所謂冠婚葬祭の各儀礼に仏教が深く根を下ろし、日常生活にも定着していたと考えるべきであろう。定着の過程に際しては、霊魂不滅という日本独自の生死観が仏教思想と融合したという観点が重要となるであろう。現代の仏教のあり方は、日常的に説法などに出掛けることなく葬式の折りだけ遺族が寺院に頼るという実態を「葬式仏教」などと揶揄される。これは、上述のように応仁の乱頃に淵源が求められる。

いま一点は、現在に至る仏教寺院に、応仁の乱から江戸初期までの創建または中興が多いという事実である。寺とは、先祖代々の墓所があり、祭祀の中心とも言うべき場所である。集落が寺院を中心に発達し、定住が進むというのは社会が安定した姿と言える。また社会の安定化と共に、檀家として農民が経済力を蓄え寺院を支えていくようになったという視点も必要である。

6．江戸時代[*12]

江戸時代は、黄檗宗を除いて新しい仏教宗派は実質的に増えていない。また、安土桃山時代に伝来したキリスト教は江戸時代の鎖国政策に伴って排除された。すわなちキリスト教禁教のために寺請制度が創設され、個人の自由で信仰の選択ができない体制となったのである。宗旨は家代々に受け継がれ、仏教はこの時代、個人を縛る側面が大きくなった。このように江戸幕藩体制下において、仏教寺院は門信徒管理の出先機関と化してしまった。また、寺院相互の関係も本寺－中本寺－直末寺－孫末寺という序列・階層が形成され、「本山が末寺を支配する」という体系が完成された。このような動きと室町中期以降の先祖祭祀という要素が融合して、近現代における日本仏教のあり方が定着したと考えられよう。それは教義を弘めるという本来的な役割よりも、本山と末寺の関係であるとか葬式や年忌法要の執行というような形式的な側面に専ら目が向けられてきたように思われてならない。

まずは江戸時代に招来立宗された黄檗宗について見ておこう。日本黄檗宗の開祖は、明より来朝した隠元隆琦（1592～1673）である。来朝は1654年、宇治の地に黄檗山万福寺を建立したのは1661年、将軍徳川家綱の許可に依った。以後は後水尾帝や諸大名の帰依を得て3500箇寺以上の寺院を開いたが現在は451箇寺に留まっている。立宗当時の黄檗宗は、中国臨済宗の影響を受けて「浄禅一致」すなわち「念仏禅」を特徴としていた。坐禅を組み、かつ「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」と中国音で念仏を唱えた。仏教以外にも隠元豆や普茶料理、中国江南風の建築様式など、江戸初期の日本文化に与えた影響は大きい。

では次に既存各宗派の動向について概観しておこう。

本願寺勢力は1602年東西に分裂させられ、現在見られるような本願寺派と大谷派の並立体制となった。もっとも浄土真宗内の宗派としては早くから、高田派・興正派・仏光寺派・木辺派・出雲路派・山元派・誠照派・三門徒派の八派が立っていた。東西両本願寺と合わせると十派となる。江戸幕府開府直前という時期に東西本願寺分断という措置が執られたのは、石山本願寺と一向一揆の時代から、宗教勢力としてのみならず一国を支配するほどの世俗勢力であったことからであろう。

臨済宗では仏智弘済禅師・盤珪永琢（ばんけいようたく）（1622～1693）が出て、「不生禅」を弘めることによって禅を平易化・民衆化した。不生禅とは、生に対する執着を断ち切り、これを超越することを眼目とする。正宗国師・白隠慧鶴（1685～1768）が臨済宗中興の祖と称されているのは、公案禅を確立した功績によるであろう。曹洞宗の黙照禅という風に対して臨済宗は看話禅として公案を重んじてきた。白隠禅師は千七百余りの公案を作成したと伝えられるが、代表的な公案は「隻手の音声（おんじょう）」であろう。これは、「両手を打って鳴らす音は誰にでも聞こえるが、片手で鳴らす音は心で聞かねばならぬ」（『広辞苑』）という意である。白隠禅師はこの公案を初めて参禅するものに投げかけたという。

曹洞宗は後述のような檀林の整備により教学が進展すると共に、寺院数も増えた。十八世紀半ばにはその数一万六千を超えたという。学問面では卍山（まんざん）道白（1636～1715）、面山瑞方（1638～1769）が出たほか、名利を追わない異色の存在として良寛（1758～1831）が挙げられよう。

幕府は諸宗に対し、修学の研鑽を奨励した。これにより、各宗派内に檀林や学問道場を開いた。天台宗では江戸の東叡山学校以下に関東十檀林、浄土宗では芝・増上寺以下に関東十八檀

林、大谷派には学寮、本願寺派には学林、日蓮宗一致派では下総・飯高寺以下の十二檀林、曹洞宗は江戸の梅檀林が代表例であろう。

これら学林などで教義を研究・教授したのと裏腹の関係にあったのが、異説の排除だと考えられる。小規模な論争は宗派内部で解決したが、大きな事件は幕府に持ち込まれた。天台宗の「安楽律の紛争」、日蓮宗における不受不施派の禁圧、本願寺派の「三業惑乱」などが幕府の介入した代表例である。安楽律の紛争とは、比叡山で守られていた大乗仏教の戒律に代えてインドの伝統的仏教教団が用いていた四分律を導入しようとして生じた。三業惑乱は、浄土真宗教義の絶対他力による念仏だけでは足りないので、身・口・意という三業によっても阿弥陀仏に帰依しようという主張（学林能化であった浄教寺の智洞が唱えた）によって生じた。宗祖親鸞聖人は念仏以外を雑行として切り捨てたはずであったが、宗派内の教義解釈としてこの種の抗争に至ったのは幕藩体制下で社会全体が安定していた故と考えられるのであろうか。

このように江戸時代の仏教各宗派を振り返ると、仏教の教義を論ずるよりも幕藩支配体制の権力機構に組み込まれたという側面が浮かび上がってくる。しかし他面では制度的に強制されたという側面があったにせよ、仏教が日常生活に根を下ろし、年中行事や習慣という点で定着した時期でもあったと総括することができる。

7．廃仏毀釈から第二次世界大戦まで[*13]

神仏習合は、日本に仏教が公伝された後二百年ほどを経た奈良時代にその端緒が見られた。この時期には全国の神社は大小を問わず、神宮寺を建立したり神前で読経を行うなど習合が進んだ。神道の総本山たる伊勢神宮にも大神宮寺が置かれ、一丈六尺の仏像が造立されたというのが最たる例であろう。また日本固有の山岳信仰においても神仏習合は早くから進行し、修験道の修行規則などには習合の痕跡が窺える。

本地垂迹説は、「法華経」の本門・迹門[*14]を基本とし、土着の諸神を迷える衆生と捉えている。すなわち諸神の本地は仏菩薩であったが、正法を護持し衆生を済度するために権（かり）に現れ（権現）、この世に迹を垂れた（垂迹）と考えてきたのである。

このように神仏習合・本地垂迹の考えは江戸時代末期まで一貫して日本思想史の底流を成していた。しかし1868年に幕藩体制が崩壊したことによって方向が一変した。この前兆としては、平田篤胤（1776～1834）による復古神道の主張で激しい廃仏論が展開されていた歴史を辿ることができる。幕藩体制の下で庇護されてきた仏教界は、体制が変ったことによって一転して存亡の危機に立った。

平田復古神道は、王政復古と神道国教化への思想的背景となった。また、幕藩体制下においても水戸藩、岡山藩、会津藩で神仏分離や寺院整理が行われており、1868年以降はこれが全国的規模で強力に推進されたと見ることも可能である。同年の神仏分離令によって、神宮寺社僧の還俗、仏像を神体として崇拝することの禁止、神名に菩薩や権現など仏号を用いることの禁止などが布達された。この分離令の意図する所は、実力行使による廃仏毀釈ではなかった。しかし一部の過激な国学者などが暴徒化し、仏像や仏具を破壊・焼却する暴挙に出た。

このように部分的な現象として神仏分離に伴う廃仏毀釈の嵐が吹き荒れたが、日本人の心性には千年以上に渡って神仏習合という考え方が刷り込まれており、一朝一夕に変えることには

無理があろう。仏教界を取り巻く趨勢は、新政府の打ち出す政策によって変化を迫られることになった。

1872年、教部省が設置されたのに伴い、僧侶は神官と共に教導職に任命された。しかしながら教部省の方針は神道優先であり、「敬神愛国、天理人道、皇上奉戴・朝旨遵守」という三条の教則の下に、仏教側はキリスト教制圧に加わっていった。また、仏教各宗派が連合して教導職養成期間である大教院が設立されたが、ここでも神道の礼拝が強制された。

神仏分離以後、二十世紀初頭までの思想風潮を反映している表現として「仏教国益」が鍵となるのではないだろうか。真宗大谷派の北海道開拓、各宗派による堕胎・間引きの防止運動、療病院の設立、監獄教誨などがその具体的発現であった。これら個々の事業は仏教の教義に沿っているであろうが、全体としては同時期の国策であった富国強兵と軌を一にしていると言えないであろうか。これは今後の研究課題としたい。

近代国家成立の動きに続き、仏教各宗派には戦争遂行に関する姿勢が問われる時代となった。十九世紀から二十世紀への移行期には、日清・日露・第一次世界大戦と規則正しく十年間隔で戦争が遂行され、その期間中に仏教界は戦勝祈願、従軍布教、出征家族や遺族の援護、傷病兵の救護を通して権力構造の一部に組み込まれていった。

近代期に入って、各宗内で宗派の整理が行われた。日蓮宗の不授受施派が公認されたなど、幕藩体制内で固定されていた分派の動き等が顕在化した結果と見なすこともできよう。後述する戦時体制以前まで、日本仏教界は次のような十三宗五十六派体制であった（奈良、編著2005, 412～415ページを参照した）。

(2) 奈良仏教系

1．法相宗
2．華厳宗
3．律宗

平安仏教

4．天台宗　天台宗、天台宗寺門派、天台宗真盛派
5．真言宗（古義）　古義真言宗、真言宗醍醐派、真言宗東寺派、真言宗泉涌寺派、真言宗山階派、真言宗善通寺派
　真言律宗
　（新義）　新義真言宗智山派、新義真言宗豊山派

浄土教系

6．浄土宗（鎮西派）　浄土宗
　（西山派）　浄土宗西山禅林派、浄土宗西山光明寺派、浄土宗西山深草派
7．浄土真宗　真宗本願寺派[*15]、真宗大谷派、真宗高田派、真宗興正派、真宗仏光寺派、真宗木辺派、真宗出雲路派、真宗山元派、真宗誠照派、真宗三門徒派
8．時宗
9．融通念仏宗

禅系

10．臨済宗　臨済宗天竜寺派、臨済宗相国寺派、臨済宗建仁寺派、臨済宗南禅寺派、

臨済宗妙心寺派、臨済宗建長寺派、臨済宗東福寺派、臨済宗大徳寺派、
臨済宗円覚寺派、臨済宗永源寺派、臨済宗方広寺派、臨済宗仏通寺派、
臨済宗向嶽寺派、臨済宗国泰寺派

11. 曹洞宗
12. 黄檗宗

日蓮系

13. 日蓮宗（一致派） 日蓮宗、顕本法華宗、本門宗、日蓮宗不受不施派、
日蓮宗不受不施講門派
（勝劣派） 本門法華宗、法華宗、本妙法華宗
（講門派） 日蓮正宗

戦時下の1939年、それまでの十三宗五十六派体制が二十八宗派に集約された。上掲(2)からの異動で指摘すると、天台宗、真言宗、国泰寺派を除く臨済宗がそれぞれ一派に集約された。日蓮宗は、日蓮宗・本化正宗・法華宗・日蓮正宗の四派に集約された。以上の各宗派と臨済宗国泰寺派と合わせて二十八宗派となった。このような宗派集約は政治における大政翼賛会と同様の趣旨に基づいており、仏教界挙げて大東亜戦争完遂宗教翼賛大会が断行された。太平洋戦争遂行に向けた異常事態であった。敗戦後は日蓮宗を除き、十三宗の体制に戻ったと言うことができよう。

8．第二次世界大戦後[*16]

上述したように、奈良仏教から鎌倉新仏教に至る主要な宗派は1945年に第二次世界大戦が終結した後、概ね戦前の宗派に再編成された。1946年11月に公布され翌年５月に施行された日本国憲法により信仰の自由が確保され、戦前のように国家神道の桎梏に苦しむこともなくなった。しかしながら1945年から21世紀に至る半世紀余りは、社会・経済・政治・文化・国民生活等あらゆる面においてかつて無いほどの激動の時代であった。このような中にあって、仏教も大きく変化していった。

法制面では、敗戦直後の1945年12月に宗教法人令が施行された。これによって戦前の十三宗二十八派から260団体の独立を見た。1951年に同令が宗教法人法に替わったのを機に、団体設立が届け出制から承認制に変更された。直近60年においては既成教団の旧態復帰および教線拡大よりも、新興教団設立が目を引く。

定義として新興宗教とは、幕末期以降に立宗され発展して現代に続く一群の宗教を指している。幕藩体制末期に起源を求められる宗派では黒住教、天理教、金光教、本門仏立講などが興った。このうち、金光教と天理教は1900年代に相次いで教派神道として独立を認められた。同じく神道系の大本教は1892年に興されたが、戦前は弾圧を受けた。1923年には法華経を奉ずる在家集団が霊友会を結成し、後続する法華系新興仏教団の先駆けとなった。現代においてはインナートリップ運動などを通して社会に定着し、会員数320万人を数えている。立正佼正会は、霊友会から1938年に分離したものである。創価学会の前身、創価教育学会は1930年に組織され日蓮正宗の信者団体として勢力を伸張したが、後に宗派とは袂を分かった。これら仏教系新興

宗教は、敗戦後から数十年間に大きく信者数を伸ばしたという点で共通している。

仏教系ではないが、戦時中に弾圧されていた新興宗教に大本教、ほんみち、PL教団（ひとのみち教団）がある。これら各宗派も敗戦後、信仰の自由が保障されたことに伴って一斉に教線を拡大した。

このような新興宗教の動きに対して、既成教団も手を拱いているわけではなかった。1960年前後から各宗派は、次のような大衆教化路線を打ち出した。

(3)　浄土宗：お手つぎ運動　　日蓮宗：護法運動　　曹洞宗：三尊仏奉祀運動
高野山真言宗：合掌運動　　真言宗豊山派：光明曼荼羅慈母運動
天台宗：一隅を照らす運動

一般語彙という観点に立つと、浄土宗の「お手つぎ」や天台宗の「一隅を照らす」という表現は、和語を採り入れて柔和な印象を与えようとしている狙いと映る。それに対して他宗派の運動名は漢語のみで、堅苦しい印象を与える。

これら運動の検証と、その後の各宗派の動向については、別の機会に譲る。

9．結び

仏教が日本に伝来して千五百年。この歳月と直近の六十年ほどを比べてみると、世情の変化という点では比肩するのではないだろうか。変化が早いからこそ、見失われがちな本質に立ち戻るべきであろう。日本仏教界が護り続けてきた法灯は、混迷の現代にあってこそ真価を発揮すべき意味があるのではなかろうか。

この小論冒頭で仮説として立てた「各宗派が根本聖典とする教典の招来時期と、各宗派の立宗時期は必ずしも一致しない」という考えは裏付けられたと言ってもいいであろう。仏教公伝直後のように、教典招来と宗派としての成立が時期的に近かったのはむしろ例外であると言える。浄土系宗における無量寿経、天台宗や日蓮宗における法華経など、早くから招来された教典に基づいて宗派が成立した例の方が多い。

今後の課題は、データベース採録の語数を増やすことが一つである。更に、各語彙の意味変化を辿るには、各時代での使用例によって原義から逸脱して一般語彙化する過程を検証していく作業も必要である。現代における共時的な語彙使用については、角岡（2004）でのように新聞記事によって定量的な検証を行うことも可能である。

註

*1　この節は、奈良（編著、2005）第6、7、8、23節を参照している。

*2　皇円著、平安末期の成立。神武帝から堀河帝に至る年代の編年史。仏教関係の記事が主（『大辞泉』）。

*3　『広辞苑』の語源説明では、「仏（ぶつ）の転「ほと」に「け」を付したもの、また「浮屠家」「熱気（ふとおりけ）」「缶（ほとぎ）」など、語源に諸説ある」と断定を避けている。

*4　経・律・論の三蔵を修めた高僧の敬称が「三蔵法師」である。「三蔵法師」は一般名詞としてよりは、唐

代に入竺して多くの経を漢訳して持ち帰った玄奘を特に指すことが多い。

*5　この節は、奈良（編著、2005）第9、24、25節を参照している。

*6　「阿」字はサンスクリット（梵語）音韻で最初の音である。最後の音は「吽」字であり、この字の本来音は「ん」である。このように「あ」に始まり、「ん」に終わるという順序は、サンスクリットの影響として日本に輸入され、五十音図として再編された。

*7　嵯峨帝は、空海・橘逸勢と共に平安初期の「三筆」と称せられるが、その書風は空海の影響を受けていると評される。

*8　この節は、奈良（編著、2005）第12、28、29、30、31、32、33節を参照している。

*9　「見真大師」追号は、聖人没後600年以上を経た1876年のことであった。その背景には1872年の太政官布告により僧侶の肉食・妻帯・蓄髪・平服着用が認められるまで、これら戒律を守らなかった僧侶を公に顕彰できないという事情があった。

*10　江戸時代に、この教義を巡って三業惑乱事件が起こり、宗派内で解決できなかったために幕府に持ち込まれた。第六節を参照のこと。

*11　この節は、奈良（編著、2005）第13、14、88、115節を参照している。

*12　この節は、奈良（編著、2005）第15、29、32、33、34節を参照している。

*13　この節は、奈良（編著、2005）第10、16、17節を参照している。

*14　法華経の前半で、序品から安楽行品までの十四品。釈尊が歴史上に出現して一切衆生を一乗に会入させた（『広辞苑』）ことより、諸仏は姿を変えて何度も出世していると考える。

*15　宗派名が現行のように「浄土真宗本願寺派」となったのは、1945年以降である。浄土真宗系十派のうち本願寺派以外の九派は現在でも「真宗」と称している。

*16　この節は、奈良（編著、2005）第18、19、20、21、22節を参照している。

参考文献

瓜生津隆真（1985）『仏教から真宗へ ― 仏教用語散歩』京都：本願寺出版社。

大谷大学（編）（2001）『仏教が生んだ日本語』東京：毎日新聞社。

柏原祐義（編）（1935）『真宗聖典』京都：法蔵館。

菅野覚明（2001）『神道の逆襲』東京：講談社。

角岡賢一（2003）「一般語彙として流通する仏教用語の考察」『龍谷紀要』第25巻第1号。pp.17-35.

角岡賢一（2004）「新聞記事データベースに見られる仏教用語」『龍谷紀要』第26巻第1号。pp.35-54.

浄土真宗教学研究所（編）（1996）『浄土三部経（現代語訳）』京都：本願寺出版社。

新村出（編）（1983）『広辞苑』（第三版）東京：岩波書店。

高田信良（2006）『宗教の祈り　親鸞の願い』京都：法蔵館。

武田龍精（2003）『宗教と科学のあいだ』京都：法蔵館。

中村元（1984）『ブッダのことば　スッタニパータ』東京：岩波書店。

奈良康明（編著）（2005）『新版　日本の仏教を知る事典』東京：東京書籍。

西尾実、他（編）（1971）『岩波国語辞典』（第二版）東京：岩波書店。

松村明（監）（1995）『大辞泉』東京：小学館。

宮元啓一（2005）『なるほど仏教用語400』東京：春秋社。

村上哲見、島森哲男（編）（2002）『四字熟語の泉』東京：講談社。

山折哲雄（編）（2000）『仏教用語の基礎知識』東京：角川書店。

附表：仏教語彙データベース

本文で下線を附した語彙を時代別にデータベース化した。

用　語	読　み	時　代	摘　要
蕃神	となりのくにのかみ	伝来－奈良	和語
国神	くにつかみ	伝来－奈良	和語
ほとけ	ほとけ	伝来－奈良	和語
三宝	さんぽう	伝来－奈良	
仏法僧	ぶっぽうそう	伝来－奈良	三宝
三経義疏	さんきょうぎしょ	伝来－奈良	
勝鬘経	しょうまんぎょう	伝来－奈良	経典名
維摩経	ゆいまきょう	伝来－奈良	経典名
法華経	ほけきょう	伝来－奈良	経典名
世間虚仮	せけんこけ	伝来－奈良	教義
唯物是真	ゆいぶつぜしん	伝来－奈良	教義
諸悪莫作	しょあくまくさ	伝来－奈良	教義
衆善奉行	しゅぜんぶぎょう	伝来－奈良	教義
自浄其意	じじょうごい	伝来－奈良	教義
是諸仏教	ぜしょぶっきょう	伝来－奈良	教義
七仏通戒偈	しちぶつつうかいげ	伝来－奈良	
講経	こうきょう	伝来－奈良	
斎会	さいえ	伝来－奈良	
放生会	ほうじょうえ	伝来－奈良	
設斎	せっさい	伝来－奈良	
金光明経	こんこうみょうきょう	伝来－奈良	経典名
仁王般若経	にんのうはんにゃきょう	伝来－奈良	経典名
南都六宗	なんとろくしゅう	伝来－奈良	
三論宗	さんろんしゅう	伝来－奈良	宗派名
法相宗	ほっそうしゅう	伝来－奈良	宗派名
華厳宗	けごんしゅう	伝来－奈良	宗派名
律宗	りつしゅう	伝来－奈良	宗派名
倶舎宗	くしゃしゅう	伝来－奈良	宗派名
成実宗	じょうじつしゅう	伝来－奈良	宗派名
十七条憲法	じゅうしちじょうけんぽう	伝来－奈良	
破邪顕正	はじゃけんせい	伝来－奈良	教義
真俗二諦	しんぞくにたい	伝来－奈良	教義
八不中道	はちふちゅうどう	伝来－奈良	教義
三蔵	さんぞう	伝来－奈良	
経蔵	きょうぞう	伝来－奈良	三蔵
律蔵	りつぞう	伝来－奈良	三蔵

用　語	読　み	時　代	摘　要
論蔵	ろんぞう	伝来－奈良	三蔵
毘盧舎那仏	びるしゃなぶつ	伝来－奈良	
神宮寺	じんぐうじ	伝来－奈良	神仏習合
修験道	しゅげんどう	伝来－奈良	宗派名
伝教大師最澄	でんぎょうだいしさいちょう	平安	人名
大乗戒壇	だいじょうかいだん	平安	
天台宗	てんだいしゅう	平安	宗派名
五時八教	ごじはっきょう	平安	
教相判釈	きょうそうはんじゃく	平安	
一念三千	いちねんさんぜん	平安	教義
四宗合一	ししゅうごういつ	平安	教義
顕教	けんきょう	平安	
修法	しゅうほう	平安	
朝題目に夕念仏	あさだいもくにゆうねんぶつ	平安	
法華懺法	ほっけせんぽう	平安	
例時作法	れいじさほう	平安	
真言	しんごん	平安	
光明供	こうみょうく	平安	
天台密教	てんだいみっきょう	平安	台密
真言宗	しんごんしゅう	平安	宗派名
弘法大師空海	こうぼうだいしくうかい	平安	人名
真言陀羅尼	しんごんだらに	平安	
大日経	だいにちきょう	平安	経典名
金剛頂経	こんごうちょうきょう	平安	経典名
両部大経	りょうぶたいきょう	平安	
六大	ろくだい	平安	教義
四曼	しまん	平安	教義
三密	さんみつ	平安	教義
三昧	さんまい	平安	教義
即身成仏	そくしんじょうぶつ	平安	教義
曼荼羅	まんだら	平安	教義
阿字観	あじかん	平安	教義
加持祈祷	かじきとう	平安	教義
三一権実論争	さんいつごんじつろんそう	平安	
天台浄土教	てんだいじょうどきょう	平安	叡山浄土教
恵心僧都源信	えしんそうずげんしん	平安	人名
末法思想	まっぽうしそう	平安	思想潮流
諸行往生	しょぎょうおうじょう	平安	
本地垂迹説	ほんちすいじゃくせつ	平安	
権現	ごんげん	平安	

用　語	読　み	時　代	摘　要
円光大師法然上人	えんこうだいしほうねんしょうにん	鎌倉	人名
正定の業	しょうじょうのごう	鎌倉	
聖道門	しょうどうもん	鎌倉	
浄土門	じょうどもん	鎌倉	
見真大師親鸞聖人	けんしんだいししんらんしょうにん	鎌倉	人名
浄土真宗	じょうどしんしゅう	鎌倉	宗派名
同朋同行	どうほうどうぎょう	鎌倉	
雑行	ぞうぎょう	鎌倉	
悪人正機説	あくにんしょうきせつ	鎌倉	
円照大師一遍上人	えんしょうだいしいっぺんしょうにん	鎌倉	人名
時宗	じしゅう	鎌倉	宗派名
二河白道	にがびゃくどう	鎌倉	
融通念仏	ゆうづうねんぶつ	鎌倉	
踊り念仏	おどりねんぶつ	鎌倉	
千光国師栄西	せんこうこくしえいさい（ようさい）	鎌倉	人名
臨済宗	りんざいしゅう	鎌倉	宗派名
不立文字	ふりゅうもんじ	鎌倉	教義
経外別伝	きょうげべつでん	鎌倉	教義
直指人心	じきしじんしん	鎌倉	教義
見性成仏	けんしょうじょうぶつ	鎌倉	教義
看話禅	かんなぜん	鎌倉	
公案	こうあん	鎌倉	
曹洞宗	そうとうしゅう	鎌倉	宗派名
承陽大師道元	しょうようだいしどうげん	鎌倉	人名
只管打座	しかんたざ	鎌倉	
立正大師日蓮聖人	りっしょうだいしにちれんしょうにん	鎌倉	人名
日蓮宗	にちれんしゅう	鎌倉	宗派名
信心為本	しんじんいほん	室町、安土桃山	教義
王方為先	おうほういせん	室町、安土桃山	教義
折伏	しゃくぶく	室町、安土桃山	
不受不施	ふじゅふせ	室町、安土桃山	
摂受	しょうじゅ	室町、安土桃山	
五山十刹	ござんじっさつ	室町、安土桃山	
一休禅師宗純	いっきゅうぜんじそうじゅん	室町、安土桃山	人名
先祖祭祀	せんぞさいし	室町、安土桃山	
黄檗宗	おうばくしゅう	江戸	宗派名
隠元隆琦	いんげんりゅうき	江戸	人名
浄禅一致	じょうぜんいっち	江戸	教義
念仏禅	ねんぶつぜん	江戸	教義
不生禅	ふしょうぜん	江戸	教義

用　語	読　み	時　代	摘　要
隻手の音声	せきしゅのおんじょう	江戸	公案
関東十檀林	かんとうじゅうだんりん	江戸	天台宗
関東十八檀林	かんとうじゅうはちだんりん	江戸	浄土宗
学寮	がくりょう	江戸	大谷派
学林	がくりん	江戸	本願寺派
十二檀林	じゅうにだんりん	江戸	日蓮宗
梅檀林	せんだんりん	江戸	曹洞宗
安楽律の紛争	あんらくりつのふんそう	江戸	天台宗
三業惑乱	さんごうわくらん	江戸	本願寺派
神仏分離	しんぶつぶんり	近代	
廃仏毀釈	はいぶつきしゃく	近代	
敬神愛国	けいしんあいこく	近代	三条の教則
天理人道	てんりじんどう	近代	三条の教則
皇上奉戴	こうじょうほうたい	近代	三条の教則
朝旨遵守	ちょうしじゅんしゅ	近代	三条の教則
大教院	だいきょういん	近代	
仏教国益	ぶっきょうこくえき	近代	
霊友会	れいゆうかい	現代	
立正佼正会	りっしょうこうせいかい	現代	
創価学会	そうかがっかい	現代	
お手つぎ運動	おてつぎうんどう	現代	浄土宗
護法運動	ごほううんどう	現代	日蓮宗
三尊仏奉祀運動	さんぞんぶつほうしうんどう	現代	曹洞宗
合掌運動	がっしょううんどう	現代	高野山真言宗
光明曼荼羅慈母運動	こうみょうまんだらじぼうんどう	現代	真言宗豊山派
一隅を照らす運動	いちぐうをてらすうんどう	現代	天台宗
葬式仏教	そうしきぶっきょう	現代	